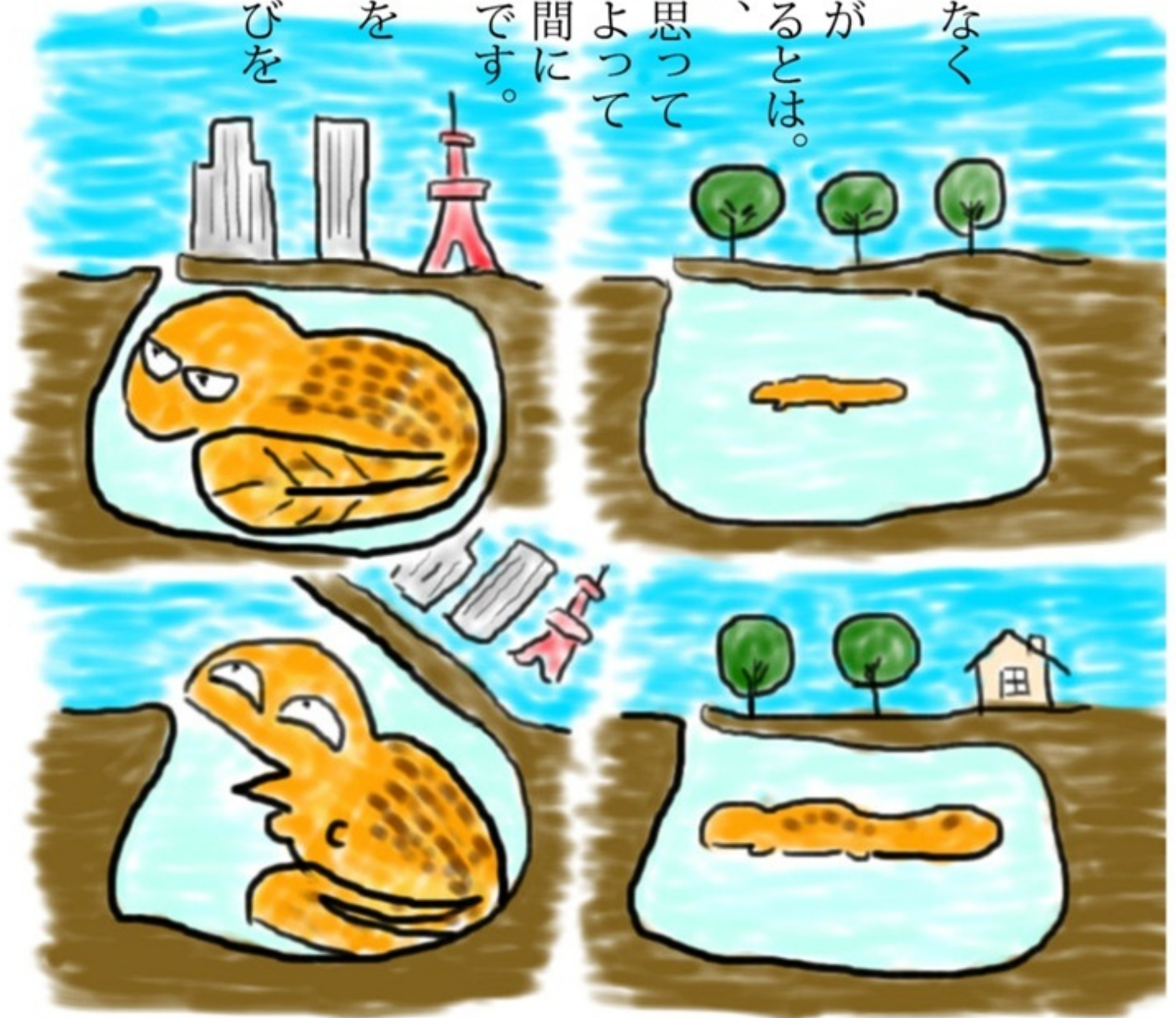


大山椒魚

大井伏鱒二



大山椒魚は驚きました。
住み処の岩穴から出られなくな
ってから数十年。
眠っている間に自分の体が
こんなに大きくなっているとは。
少し体を動かしてみると、
もう絶対に出られないと思っ
ていた穴倉は、自分の体によつて
とうに破壊され、知らぬ間に
自由の身となっていたのです。
このまま身を起こせば、
何十年ぶりかにお天道様を
拝める。
大山椒魚は意を決して伸びを
しました。



地面から大きな目玉が2つ現れました。
続けて、小山のような大きな体が
出てきました。

久しぶりにあびるお天道様の光で、

背中にポカポカと温かくなりました。

大山椒魚はあたりを

すこし歩き回ってみました。

足の下や腹の下では

家屋や自動車などが潰れる

妙な感覚がしましたが、

とても気持ちよかったです。

すると目の前に、

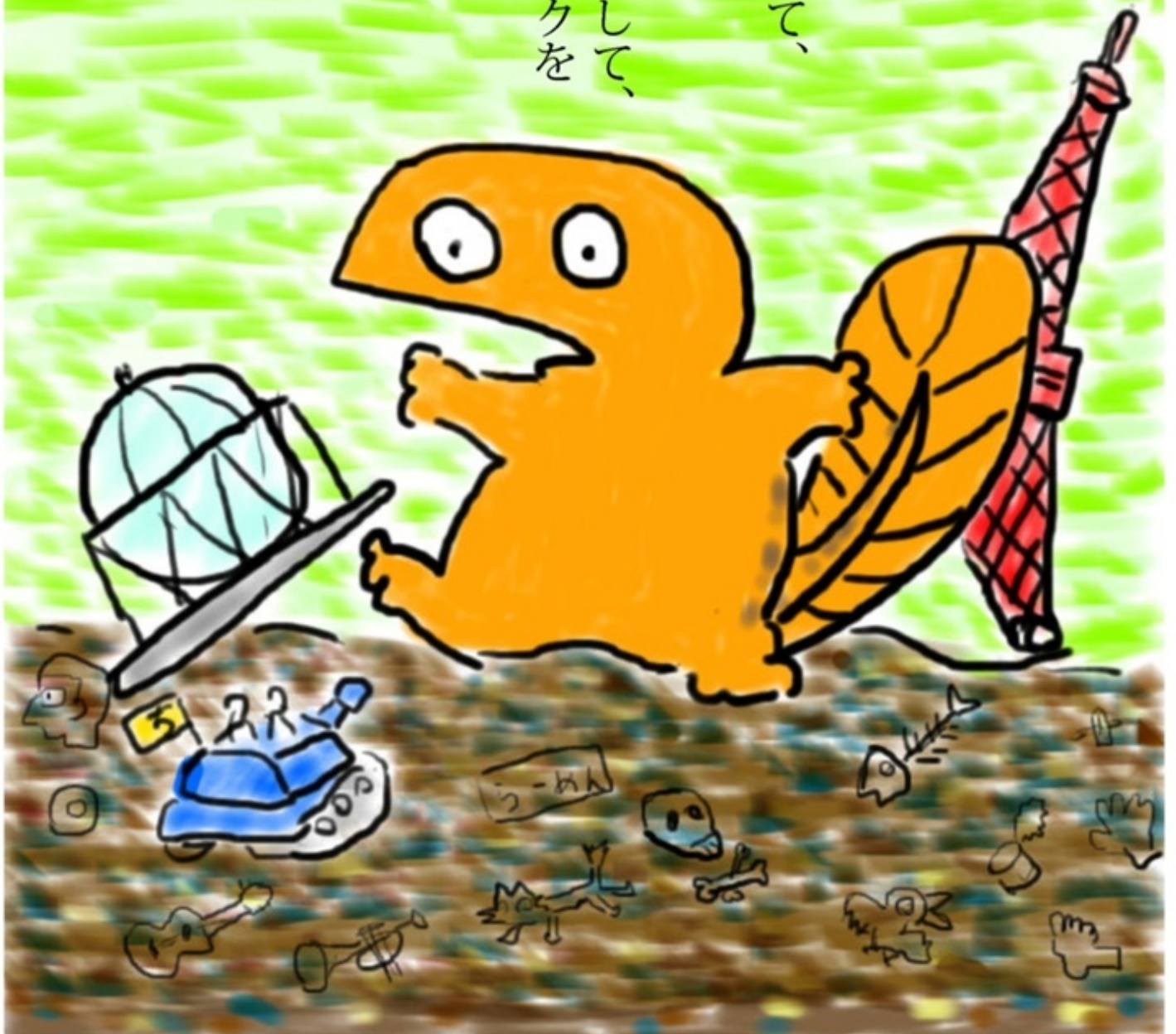
一台の戦車が現れました。

地球防衛隊の戦車です。

大山椒魚はびっくりして



立ち上がりました。
そのとき、ちよつとよろけて、
近くにあった鉄塔を倒して
しまいました。
慌てて態勢を立て直そうとして、
別の場所にあったガスタンクを
踏んづけてしまいました。
ドカーン！
ガスタンクが爆発します。



しかし戦車はなかなか
撃ってきません。

じっと大山椒魚に砲身を
向けたまま、

静かに止まっています。

戦車の中では、こんな会話が
交わされていました。

「隊長！ やはり大山椒魚は
特別天然記念物です。

文化財保護法によって
守られています！」

「な、なんだって？」

緊張した空気が戦車を包みます。
さらに隊長が言いました。



「余計な心配だが、あれだけ大きな大山椒魚は、何を食べるのだろうか」

「ははっ！ 大山椒魚は、おもに魚、カエル、ミミズなどを食べるそうです」

「すると、大魚や大カエルや大ミミズがいないと困るな」

「おっしやるとおりで！」

「余計な心配だが、どうするつもりなんだ？」

「どうするんでしよう！」

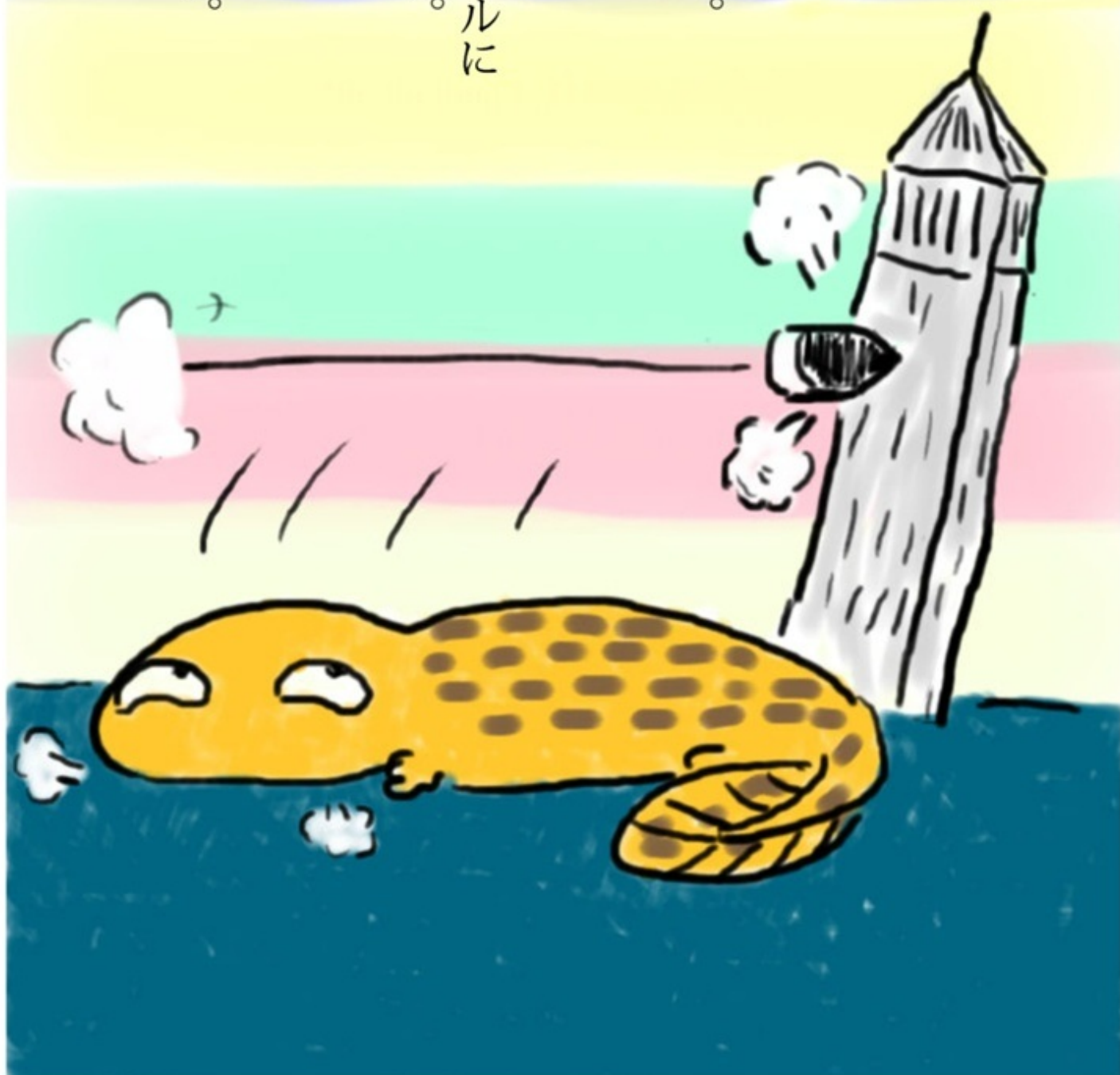
地球防衛隊の戦車の中には、さらなる緊張が走ります。



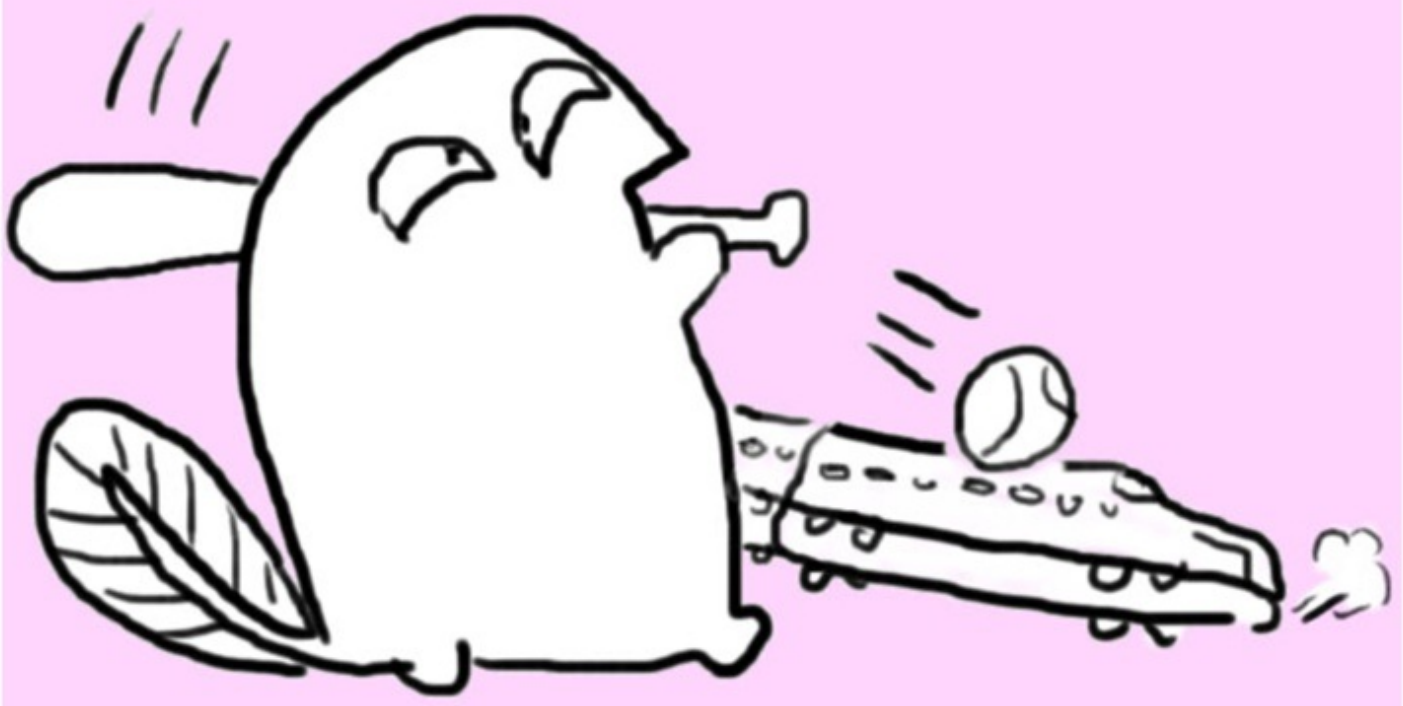
お腹が減った大山椒魚の
目には、戦車がだんだん
カエルに見えてきました。
大山椒魚は、カエルを
食べようと大きな口を
開けて戦車に迫ってきます。
「隊長！ 大山椒魚が
こちらに向かってきます！」
「よし、撃て！」
これまでの心配をよそに、
隊長は簡単に命令を出しました。



バーン！
大きな音とともに、
大砲の弾が大山椒魚
めがけて飛んできます。
大山椒魚はとっさに
身をかわします。
外れた大砲の弾は、
そのまま背後の高層ビルに
命中して爆発しました。
「外れました！」
砲撃手が報告します。
「二本取られたな。
かななかやるじゃないか。
続けて撃て！」



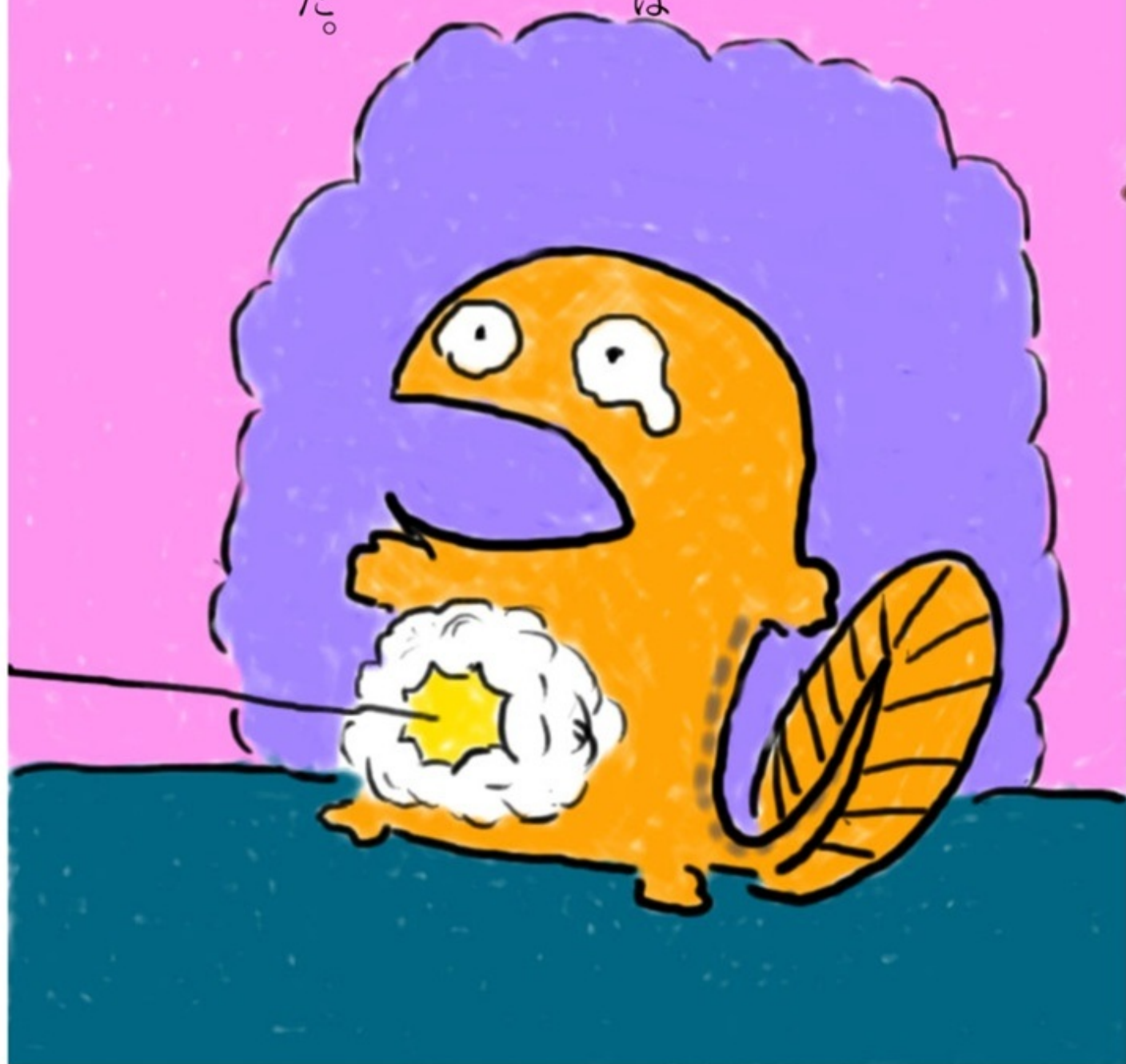
戦車はもう一発撃ちました。
バーン！
今度は、大山椒魚が手で
弾を払いのけます。
弾は近くを走っていた
新幹線に命中して爆発しました。
「構わん、もっと撃て！」
隊長が命令します。



バーン！
続けて戦車は大砲を撃ちました。
大山椒魚は尻尾で弾を
はじき飛ばします。
跳ね返った弾は近くの
住宅地に落ちて
爆発しました。
大山椒魚の3連勝です。
しかし、隊長はこのとき
勝算ありと悟りました。
「次の1発でしとめるぞ！」



バーン！
戦車が続けてもう一発
撃ったとき、隊長の
予想どおり、大山椒魚は
跳ね返すことも避ける
こともできず、
弾はお腹に命中して
爆発しました。
大山椒魚は、
その場に倒れ込みました。



「やりましたね、隊長！」

しかし、よく4発目で

仕留められるとわかりましたね」

「なーに、あちらさんに

4連勝はないと確信したのだよ。

だって、サンシヨウ魚だから」

死闘を制した隊長の

目が涼やかに輝いた。

おしまい



大山椒魚

<http://p.booklog.jp/book/72763>

著者：大井伏鱒二

絵：中川善史

発行：文豪堂書店

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72763>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72763>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ